

平成29年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT29138 プログラム名 点字の秘密を探る！

～自分の名前の 3DCG 点字を、コンピュータで作ってみよう～



開催日：平成29年8月5日(土)

実施機関：鶴見大学

(実施場所) (1号館 403 教室他)

実施代表者：元木 章博

(所属・職名) (文学部ドキュメンテーション学科・教授)

受講生：小学5・6年生 17名

関連URL：<http://www.tsurumi-u.ac.jp/info/publish/170531.html>

【実施内容】

多くの小学生は、4年生の国語やささまざまな学年で実施される総合の授業で、障害のことを幅広く学ぶ。中でも「点字」は、視覚障害を語る際、忘れてはならない大切なキーワードの一つであることは誰もが認める事であろう。実際、受講生の幾人かと話した際、得られた情報だが、彼らは、点字器を使い、実際に点字を打った経験があった。実施協力者である学生の自己紹介の際、担当児童の氏名を告げることで、安心感を出すよう心掛けた。

このプログラムは、単なる点字を打つ機会を彼らに提供することが目的ではなく、「点字」をキッカケに彼ら・当事者(視覚障害者等)のことを今まで以上に理解を深めてもらうことにある。もちろん、点字自身の優れた点についても伝えるようにした。これらのことを踏まえて、講義を実施した。



前半は、講義中心であったため、児童向けに半構造化したワークシートを用意し、話のテーマに関わることをメモするよう促した。

後半は、パソコンや点字器を駆使して、白黒反転墨字+点字名刺を作成した。その後、実施代表者の教員や実施協力者である学生らと名刺交換を行った。実習の最後は、点字の点をデジタルデータに置換する仕組みに関する講義内容に基づき、自分の氏名をデジタルデータに変換し、科研費で開発中のシステムで自分の氏名の点字 3DCG 作成作業を実施した。

◆当日のスケジュール

9:40 受付開始 (1号館 1F 集合) —10:00 開講式 (実施代表者および協力学生 11 名のあいさつ、当日のプログラムおよび科研費の説明) —10:20 講義① (「見えない、とはどういうことか」) —10:40 休憩—10:50 講義② (「盲人の字の歴史、点字の仕組み」) —11:20 休憩—11:25 実習① (「白黒反転した点字名刺を作ってみよう！」(ワープロ編)) —12:00 昼食・休憩 (大学食堂) —13:00 大学図書館見学 (視覚障害に関する企画展実施中) —13:40 休憩—13:50 実習② (「白黒反転した点字名刺を作ってみよう！」(点字打点編)) —14:20 名刺交換タイム「元木先生と名刺交換しよう！」—14:30 休憩—14:40 実習③ (「自分の名前の点字 3DCG をパソコンで作ろう！」) —15:20 休憩—15:25 クッキータイム・ディスカッション—15:50 修了式 (アンケート記入、未来博士号授与) —16:20 解散

◆実施の様子





◆事務局との協力体制

教育研究支援課が、学外(参加希望者や日本学術振興会、横浜市教育委員会、鶴見区、保険会社等)や学内(総務課、入試課、地域連携推進課、学術情報事務室・図書館、管財課等)とのやり取り、とりまとめ、Web ページ作成依頼、会計処理、事務手続き、ポスター・チラシ作成、大学近隣小学校への挨拶同行、資材・お弁当・お菓子・飲み物調達・配置・ごみ処理、参加申込・キャンセル処理、当日受付、実施手順書作成、受付までの各所案内板設置、荷物運搬等の多くの支援を受けた。

◆広報活動

本学広報誌(CampusNOW)での特集ページや神奈川県等による夏休みプログラム紹介らの広報誌への掲載や、Web ページ(本学、神奈川県や教育系会社による夏休みプログラム紹介ページ)で本プログラムの紹介、近隣公共図書館や小学校でのポスター掲示やチラシの設置、近隣小学校校長先生へのご挨拶、横浜市教育委員会や鶴見区への後援依頼を実施した。

◆安全配慮

プログラム中に、ハサミを使う実習作業がある為、受講対象者である小学生と実施協力者である学生に対して保険をかけた。事故防止のために、実施代表者が当日プログラム全体を通して気を配るのに加えて、実習中は実施協力者を含め、受講生 17名に気を配り、安全を十分に確保した。

◆今後の発展性、課題

障害者差別解消法が施行され1年が経過した昨今、公共施設を中心に様々な利用者に対するサービスが増え始めている。2020年には東京オリンピック・パラリンピックを控え、ますます多くの人々による多様性の理解が必要となる。その中でも、点字利用者である視覚障害者等(全盲やロービジョン)の理解は不可欠な物である。そのためには、今まで以上の知識(ルイブライユが点字を発明したことや石川倉次が日本語で使えるように翻案したこと)だけでなく、点字が発明される前やICTを活用している現代の彼らの生活等も知る必要がある。加えて、視覚障害者によるICTを用いた墨字でのコミュニケーションがあるならば、晴眼者は点字運用者として彼らとのコミュニケーションを試みるだけの力を十分に蓄えたいものである。

◆後援

横浜市教育委員会および鶴見区の後援を得て、本プログラムを実施した。

【実施分担者】 無し

【実施協力者】 _____ 11 名

【事務担当者】

教育研究支援課 福岡 深雪